

愛されて、勝つ

原田大輔



## 愛されて、勝つ

— 川崎フロンターレ  
「365日まちクラブ」の作り方

原田大輔 著

小学館クリエイティブ

税込価格 1,980円

昨年六月に在外教育施設教育振興法が成立し、海外の日本人学校や補習授業校には現地における「我が国の魅力の増進に資する活動」も求められるようになった。そのためには、海外でも地域に根ざし、貢献し、愛されることが必要だと思ふ。

この本はサッカークラブの話なのに、帯には「地方創生ビジネスのバイブル」と謳われている。プロスポーツ不毛の地といわれた神奈川県川崎市で後発のJリーグクラブとして生まれた川崎フロンターレが、いまや福田紀彦川崎市長に「(まちの)シンボルとして根づいた」「まちづくりのパートナー」とまで言われるようになったプロセスを、二十三人の関係者にインタビューして振り返った丁寧な記録になっているからだ。「プロスポーツ不毛の地」といわれた背景には、かつてプロ野球では大洋ホエールズ(現・横浜DeNAベイスターズ)とロッテオリオンズ

(現・千葉ロッテマリーンズ)が、Jリーグではヴェルディ川崎(現・東京ヴェルディ)が、いずれも本拠地としての川崎を去っていった歴史がある。フロンターレは当初、「どうせまた川崎から出ていくんだろ」と思われ、観客席も閑散としていた。

そのフロンターレにとって大きな転機となったのが、二〇〇〇年だった。この年、Jリーグ参入を表明して準会員となってから四年目にして初めて戦ったJ1の舞台でダントツの最下位となり、一年でJ2に降格。これを立て直すべく年末に就任した武田信平社長は地域密着のクラブ運営を掲げ、年が明けると市内のさまざまな団体の賀詞交換会に顔を出したり、自らの足で商店街を回ったりはじめた。それ以前、一九九七年にクラブ初のプロパー社員として採用されホームタウン推進室に配属されていた天野春香は、もともと足繁

く市内の商店に通っては領収書に「川崎フロンターレ」と宛名を書いてもらうことで知名度を上げようとするような活動をしていた。天野と同じ九七年に選手としてフロンターレに移籍してきた中西哲生もまた、「どうやったらクラブを知ってもらえるのか」をつねに考えていた。

余談になるが、中西哲生と福田紀彦は、いずれも本誌「今月の顔」に登場している(中西は二〇一三年十月号、福田は一五年二月号。ふたりとも元帰国生である)。天野も大学時代にアメリカに留学してスポーツマネジメントを学んでいる。彼らに共通しているのは、「地元のチームが地域に住む人たちの誇りになっていく(福田)」、「地元の人たちがみんながみんな、チームを愛し、応援していた(天野)」と、アメリカでのスポーツのあり方を知っていたこととで、中西も選手としては珍しく「クラブとして地域に貢献し、根ざしていく」ことを大切にしていた。

地域密着に舵を切ったフロンターレは、奇抜なアイデアを込めたイベントを数多く行うようになる。それは現役選手も巻き込んで「あんなことを選手にやらせているから優勝できないんだ」と言われるほどだった。サポーターもまた、初めてスタジアムに来た人が不快な思いで帰らないようにとブライニングをしない応援スタイルを確立し、「甘いから優

勝できないんだ」と言われ続けた。

リーグ戦での二位は三回、カップ戦の決勝に敗れて準優勝に泣いたのが五回。しかし「強いから好き」ではなく「愛されているから強い」チームでありたいと語るのは、二〇〇一年に大卒新人として加わり、十三年間も守備を支えた伊藤宏樹だ。中西の引退と入れ替わりで加入した伊藤は、選手として地域貢献活動に率先して参加するという中西が担っていた役割も引き継いだ。同様に熱心に市民やサポーターと交流したのは、伊藤の二年後輩で十八シーズンにわたってフロンターレひと筋で活躍し、レジェンドとなった中村憲剛である。筆者は、二〇一七年にフロンターレが悲願のJ1リーグ初優勝を果たして中村がピッチに泣き崩れた姿を、本拠地等々力陸上競技場のスタンドから目撃している。そのとき中村は、「優勝できないという」周囲の声を完全に打ち消し、自分たちを肯定することができた」と思ったと述べている。筆者も「強いから」ではなくフロンターレの姿勢を愛したからこそ川崎を「ふるさと」と思い定めた。勝敗にかかわらず応援し続ける。フロンターレの経験は、在外教育施設の地域貢献にも応用できるのではないだろうか。「魅力を増進する」ためのさまざまな考え方と具体例が、この一冊に詰まっている。

(選・評 古家淳)